

## ギユヨ一の「時間觀念の生成」(ベルグソン)

服部英次郎譯

ギユヨ一の「時間觀念の生成」(La genèse de l'idée de temps)は一八八五年に「哲學雜誌」(Revue Philosophique)に發表され、彼の死(一八八八年)後、一八九〇年に義父フワイエの序説が附せられて、フェリックス・アルカンから出版された。此の書はベルグソンの時間論の先驅として讀まれる。(因にベルグソンの「意識の直接與件論」が公にされたのは一八八九年である)此に譯出するのは、ベルグソンが一八九一年に「哲學雜誌」第三十一卷に於て試みたアナライズである。

「フワイエ氏の配慮によつて出版された」此の甚だ興味ある小著に於て、ギユヨ一氏は如何にして持續の觀念が人間の意識の中に發展するかを示さうと企てた。著者は先づ時間の觀念の受動的形形式(La forme passive)と能動的根底(le fond actif)とを區別する、彼は時間の河床(lit)を其の流

(cour)に對立させる。第一の見地よりすれば、時間の觀念は四つの要素差異(différence)、類似(ressemblance)、數(nombre)、度(degré)を含む。同質的集團に於ては、實際、何物も時間の觀念を生み出すことは出來ないであらう、持續は或る印象の多様あつてはじめて始まるのである。併し他方、絶對的異質——若し此の如きものが可能であるなら——に於ても亦、連續性を主要特性とする時間は容れられないであらう。さて、差異と類似との知覺によつて二元性の觀念が生じる。そして二元性によつて數が構成される(二〇—二二頁)。度の觀念は如何と言へば、其は時點(moment)の觀念と密接な關係を有して居る。何となれば時

間の各時點は活動性と感受性とに於ける或る度を豫想するから〔二四頁〕。されば畢竟時間が其の中に動くやうに思はれる框、即ち時間の形式は差異あると共に類似し、度の多數性を形成せる諸表出の序列である〔二五頁〕。

次に、著者が「時間觀念の能動的根底」と呼ぶものを規定しなければならぬ。此の能動的根底は意識が過去、現在、未來を區別する限、意識其のものである。併し此の區別其のものは習得的である、其は、分析を窮めれば、働かきかけられることを (pariti) と働かきかげることを (acti) との區別に歸せられる。「我々が或る苦惱を感じそして其を遠けるために抵抗を起すとき、我々は時間を二つに即ち現在と未來とに割り始める。此の快と苦とに對する反作用は、其が意識的になるときには、意圖 (intention) である。そして此の意圖こそ、無意識的なるか反省的なるかを問はず、同時に空間

と時間との觀念を生み出すものである〔三一頁〕。「未來とは、本來は、前にあるもの (le devant être) である。其は私が有しないもの、欲し求めるものである。……本來、時間の流は欲求されたものと所有されたものとの區別に他ならない。そして此の區別其のものは満足の感情を伴ふ意圖に還元されるのである〔三二—三三頁〕。此の意圖其のものは、先づ、力或は努力に他ならない。未來とは動物の前に (devant) あるもの、彼が捉へようと努める (chercher) ものである。過去とは後にあるもの、彼がもはや見ないものである〔五頁二〕。されば分析を窮めれば、繼起 (suissence) とは空間に於て行はれた主動的努力 (l'effort) の——意識的になれば意圖である努力の抽象である——ギュヨー氏は、其故漸次に、心象の時間に於ける配列の起源或は展開を空間の中に求めようとするに至つた。「若し私が A 點から B 點へ行き、そし

てB點からA點へ歸るなら、私はかくすることによつて二系列の感覺を得る、そして其の各項は夫々他の系列の諸項の一つに對應して居る。但し、此等の對應せる諸項は、我々の精神に於ては、或は目標とせられたB點との關係によつて或はA點との關係によつて敷衍されてある。されば私は、二系列を首尾完全に一致させるためには、其の順序を顛倒して二系列を相互に當てはめさへすればよい。此の如き、二群の感覺の完全な一致こそ、ひとの知る如く、最もよく空間を時間から區別するものである。私が此の如き、可能的な或は實在的な一致を考へないときには、私は記憶の中に明瞭さの順序に従つて整頓された唯一つの系列の感覺しか有しないのである……かくして、前方に未來に向ふの内的展望(*une perspective intérieure*)が成立する「三八頁」。

ギュヨー氏は如上の分析からして、時間の觀念

ギュヨーの「時間觀念の生成」

は空間の觀念から取り出され、そして運動が媒介の役をなすと結論する。「時間は運動即ちキネーシスの抽象、我々が相互に區別された感覺或は努力の綜體を要する型式であるといふことが出来る」(三七頁)。又少しく後には、「人間の意識に時間を作り出すものは空間に於ける運動である、運動がなければ時間はない」(四七頁)と言つて居る。

回想の時間に於ける位置視定其のものも空間の媒介によつてなされる、何となれば、回想の框は、何をさて置き、或る場所である、そして其が或る時日の回想を喚起するのであるから(六三三頁)。リボー、テーヌ兩氏によつて我々が正確な仕方で諸心象の時間に於ける位置を規定するために標點(*point de repère*)を使用することが示されたからには、ギュヨー氏に従へば、此等の標點は常に延長に於て、或は延長に關連して求められることが附言されねばならない。假令、標點として或る大

なる精神的苦惱は大なる喜悅が考へられても、此の苦惱此の喜悅は不可避的に空間に於て位置を規定されねばならない。かくしてこそ其等は時間に於て位置を規定され、従つて其等自らは時間に於ける新しい位置規定に標點の役をなすことが出来るのである〔六七頁〕。時間に於ける位置規定と空間に於ける位置規定との間にはたゞに類似が存するのみならず、又一致が存する。其故に、我々は

たゞ空間の媒介によつてのみ時間を測ることが出来るのである。「諸君は或る時間に、或る環境に於てなしたことを想起し、此の回想を諸君の現在の印象と比較して、其は殆ど等しい或は等しくない長さであると言ふであらう」〔七四頁〕。

然らば、如何にして我々は時間を空間から區別するか。此の區別をなすのに最も役立つ外的感覺は、ギュヨー氏に従へば、聽覺である。其の理由は他ではない、聽覺は空間に於てはたゞ甚だ漠然

としか位置を規定しないのに反して持續に於ては極めて明瞭に位置を規定するが故である〔七四頁〕。聽覺に次いで想像である。「我々は運動をたゞ我々の脚のみを以てするのではない、我々は運動を我々の表出を以てするのである。そして我々は此の種の内的な散歩を外的な運動から區別するの躊躇しない」〔七五頁〕。

持續の評價が「内的視覺」(Topique intérieure)の現象に他ならないからには、其は本質上相對的であるだらう。其は、實際、(一)表出された諸心象の強さ (intensité)、(二)此等の心象間の差異の強さに、(三)此等の心象の數と其の差異の數とに、(四)此等の心象の繼起の速さ (vitesse) に、(五)此等の心象間相互の關係に、(六)此等の心象と其の關係とを理解するに要する時間に、(七)此等の心象に對する我々の注意の強さに、此等の心象に伴ふ快と苦との感動と欲望と感情とに、(八)

此等の心象と我々の期待 (attente) と我々の豫見との關係に結び付けられて居る。ギユヨー氏は、彼が「時間の錯覺」(Les illusions du temps) を呼ぶものに特に一章を献げて居る。彼は此の章に於て、類稀なる俊敏を以て、我々が持續の評價に於て犯す若干の誤謬を分析して居る。彼は此等の誤謬を或は空間に於ける知覺の錯覺に類似せる展望の錯覺によつて説明し、或は感情的な原因に歸する。例へば著しい、異つた事件に充ちた一年が比較的長く思はれるのは、隔たつて評價された時間の外見上の長さは想起された事件に於て知覺された分明な (fran-chie) 強烈な (intense) 差異の數に比例して増加するからである〔一〇四頁〕。次に年月が青年時代にはかくも長く、老年時代にはかくも短く思はれるのは、主として、青年時代の印象は潑瀾として新鮮で數多くあるからである、青年時代の年月は、其故、充實し千差萬別である〔一

ギユヨーの「時間觀念の生成」

〇〇頁〕。

ギユヨー氏の結論は次の如くである。「時間は意識の制約ではなくして其の單なる結果に過ぎない。時間は意識を構成するのではなくして、其から派生するのである。時間は我々が現象に課する先天的 (a priori) 形式ではなくして、經驗が現象間に樹立する諸關係の綜體である。——此の如き意味に於ては、時間は進化の諸形式の一つに他ならぬ。其は事物間に導入された差別である、其は或る異なる環境に於ける類似の印象の、又は或る類似の環境に於ける異なる印象の再現である。時間 (Le temps) は宇宙の變化の抽象的型式である (Le temps est la formule abstraite des changements de l'univers.)。我々は同じ結論がフウイエ氏が此の書のためにものした注目すべき序説に於て展開されて居るのを見出す。フウイエ氏はカントの感性の純粹形式説に力強く反對する。時間の觀念は先天的に與へ

られるのではない、其は無限、無量、普遍的因果性の觀念と同様に、人間の反省の洗練された産物である。其は「先づ孤立せる表出から漸次に内包的、外延的持續的系列の表出にまで向上する」知性の發達の結果である。

如上のギュヨー氏の研究とフウイエ氏の序説との分析に於て我々はたゞ根本的な論題のみを考慮せんがために、多くの獨創的な見解と巧妙な比喻とを顧みなかつた。今若しひとが此の理説の原理を取出さうと努めるなら多分、ひとは此の理説が本質的には時間を我々の意識に與へられた或は提出された實在と見做すことと、如何なる仕方によつて我々が時間に於て過去、現在、未來を區別するやうになるかを規定することゝに存すのを見出すであらう。ギュヨー氏が時間に於ける展望に就いて語るとき、其は比喻ではない。實際は、彼

には空間に屬するものが與へられるやうに、時間が與へられるのである。そして特に、我々が此の新しい種類の空間に於ける諸連續面を區別するはたらきの機構を叙述しようとするのである。ギュヨー氏は、其故此の研究に於ては、進化論的心理學者の方法に従つて居る、彼は我々に、意識の對象への連續的順應を示して居る。

さて、此の如き方法は、我々の見る所によれば、多くの心理學的問題には適用されることが出来るが、時間の問題には適用されることが出来ないのである。實際、如何なる仕方によつて我々が或る對象を認識するに至るかを問題とすることは此の對象が不變的であり、そして言はゞ意識の外にあることを假定することである。併し此の如き假定は、絶えず流れ、従つてたゞ意識として記憶としてのみ存在することを本質とする持續に關係するや否や、矛盾するやうになる。其故、此の場

合には、綜合によつて時間の觀念の進化を再構成することは出来ない、反對に分析を試みることによつて、純粹繼起・時間の直接的直觀、我々が時間、比量的思惟と言語との最大の便宜のために包み込む諸形式を分解しなければならぬ。

此の如き見地よりすれば、ひとは純粹時間が分離せる或は區別された時點を有しないのを、適切に言へば其の何れの部分も始まることなく終ることなく、其の各部分は、日光のスペクトルの連続的色彩のやうに、總ての他の部分に延び連つて居るのを見出すであらう。反省的意識に現れるが如き區別された繼起は、我々が我々の意識の状態の相互滲透に代置する、延長的諸心象の、同質的空間への、分解と並置とに他ならない。此の如き代置は、尙ほ又、我々の外に、即ち空間に、其の繼起は我々の意識の状態の繼起と何等の類似をも有し得ず、其と同時にある此等の内的状態の未分の

連續を區別された斷片に裁斷する非連續的變化がなければ、不可能であらう。其故、同時性は、實の持續である内的持續と、我々が其の刹那の閃光即ち持續しない部分しか知覺しない外的時間との連鎖、接觸點である。

ギュヨー氏が、實際には空間に屬する諸特性を時間の屬性とするのは、此の如き、此の問題に適用され得る唯一の方法に従はなかつたが故である彼は特に、空間と時間とを區別するのに、空間的系列は復歸することが出来るのに反して、内的な展望は後方から前方へ、一定の方向に進むといふ事實を以てする。「繰返された同一の感覺、同一の方向に、同一の意圖に於て繰返された努力は、其の最初の諸項は比較的不明瞭であり最後の諸項は比較的明瞭である。系列 (series) を形成する……」併し、系列は、ギュヨー氏が解するが如き意味に於ては、空間以外に於て考へられ得よう

か。繼起する諸項の系列の表出は、疑もなく、繼起を含んで居るが、併し又他方、並置をも含んで居る。何となれば、我々は経過する諸項を、繼續するであらう諸項に並置せんがために、保持し不動にするから。併し並置と不動とは空間以外に於ては考へられ得ない。思惟された (Denke) 系列は常に、多かれ少かれ、空間の中にある、純粹持續に於ては、殆ど經驗された (vom) 諸系列以外のものはない。

ギュヨー氏は、反省的意識によつて知覺されるが如き時間が持續の空間への翻譯であることはよく理解したが、如何にして此の翻譯がなされるかを、何故に此の翻譯が可能であるかを、特に、何によつて實の持續は成立するかを、實の持續を象徴する空間によつてなされる抽象を看過したやうに思はれる。如何にして翻譯はなされるか、其は多分、時間と空間との連鎖である。同時性 (sim-

ultaneität) の媒介によつていあらう。何故に其は可能であるか、我々の心的状態と外界の状態とが同時的であるが故に。最後に、純粹持續は空間なしには何であるだらうか。其は、數の諸單位の多様性と何物をも共有しない多様性、即ち計算された多様性ではなくして經驗された多様性である。——然るに、ギュヨー氏によれば、時間は「我々が相互に區別された感覺或は努力の綜體を要約する型式」である。彼は「區別」(distinction) といふことが既に、空虚なる間隔によつて相互に分離せる、従つて空間の中に散在せる諸項を豫想することを看過したやうに思はれる。——時間の流は又本來は、「欲求されたものと所有されたものとの區別」であるだらう。併し先づ、其は實際に現在なるもの單に思惟されたものとの、實在的なるものと可能的なるものとの、知覺されたものと認識されたものとの區別であると言つても正當だらう



——次に正確なそして數的な區別の觀念其のものも既に、二つの區別された項が並置される空虚なる空間を含んで居るのである。

實を言へば、本質的な問題は次の如く課せられる。たゞ一種の多様性——數的多様性しかないか或は他の種類の多様性が考へられ或は知覺されることが出来るか。若し第一の假定——其は正しくギュヨー氏が立てたやうに思はれるものであるが——に立つなら時間を空間なしに表出しようとしても徒らである。何となれば先づ時間に空間が混入されるから。即ち數的多様性を語る者は並置の多様性、空間に於ける多様性を語るのである。此に反して、時間が根本的に空間と異り、そして空間なしに考へ得られるときには、其はたゞ、數的多様性以外に、明確な區別をも並置をも含まない他の多様性が存在しなければならぬといふ條件附でのみ存在することが出来る。然るときはギュヨー氏は心理學者として如何にして滲透の多様性は並置の多様性に表現される (sexpinner) かを我々

に示さねばならぬであらう。そして彼は此の問題をたゞ、一方意識を、意識が其自らに歸る少數の時點に於て、分析することゝ、他方意識以外に於ける時間の役割に關しては、實證科學即ち物理學、星學、力學に尋ねることゝによつてのみ解決する事が出来るであらう。

フウイエ氏が彼の序説に於て「快より苦に推移しつゝ變化する存在は、彼が未だ變化の二項の關係を認識しないときにも、變化し (changer) つゝあるのを感じる事が出来る」と言つて居るのは我々にはギュヨー氏よりも一屬分析を進めたやうに思はれる。彼が時間を直接經驗の所與と見做し、決してカントが欲した如くに、感性の先天的形式と考へないのは同様に正當である。此の如き見解を徹底したなら、彼はカントの理説が正しく實の特續と其の空間的符合との混同に存するのをそして哲學者に課せられた問題は常に二種の多様性があるか或は我々はたゞ一種の多様性しか知覺しないか否かを知ることであるのを見出したであらう。